

発行日 2007年3月31日 編集 広報委員会

発行 日本パーソナリティ心理学会(旧・日本性格心理学会)

事務局 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献印刷社内

電話 03-5389-6243 FAX 03-3368-2822 URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/jspp>

【巻頭言】

機関誌『パーソナリティ研究』の過去、現在、未来

坂元 章(お茶の水女子大学)

私は、1992年の本学会の発足当初から数年間、機関誌編集委員会のメンバーとしてその業務に関わらせていただいた(当時の学会名は『日本性格心理学会』であり、機関誌名は『性格心理学研究』であった)。

当時は、論文投稿が少なく、それが大きな問題であった。1年に1号しか雑誌は発行されていなかったが、そこに5本くらいの論文が掲載できるだけであった。雑誌や論文審査のあり方を決めていく事情もあって、毎月のように委員会の会合が開かれたが、それも虚しくなかなか原稿は来なかった。

しかし、今日では、1年に3号が発行され、原著と資料を合計して20本以上の論文が掲載されている。これは、数ある心理学関係学会誌の中でも最も急成長し、成功を収めた部類に入っているのではないだろうか。これも、本学会の役員や会員の尽力の賜物であると思う。

本学会はもともと、性格やパーソナリティについて議論する場が乏しかった状況を改善するために設立されたものであるが、当時たびたび意見として聞かれたのは、従来の学会が持ってきた規範 例えば、特定の方法論やスタイルに該当しない研究や論文は最初から排除するとか、年齢や身分などの人間関係を気にする にとら

われず、本学会を、もっと自由に活動できる場にしたいということであり、そうでなければ、日本心理学会を始めとしてすでに多くの心理学関係学会がある中で、新たに本学会を設立する意義はないというものであった。

機関誌編集委員会においても、この考え方はしばしば強く出され、紙幅の制約のため、ここではとても書けないが、いろいろな出来事があった。ショートレポートが問題なく設置されたのも、伝統から自由であったり、独自性を求めようとする考え方が下地にあったからであると私は認識している。これは、他の雑誌にはあまり見られない本雑誌の特徴であるとともに、多くの投稿を集めており、本雑誌やパーソナリティに関する研究の活性化や発展にとって意義があったのではないだろうか。

本雑誌の今後を考えてみると、2つの方向性があるのではないか。一つは、このままのスタイルで発展を目指すものである。現在の本雑誌は、ショートレポートはあるものの、伝統的な学会誌とそれほど違いのない内容になっているようにも見える。それでもすでに多くの論文を集め、堂々とした内容になっているので、さらに掲載論文の量と質を向上させて、誰からも正統と言われる、権威を持った雑誌を目指すのも

一つのあり方であると思う。

もう一つは、かつて議論されたように、自由さや、本雑誌の独自性を追求していく方向である。審査基準を再考することや、大胆な企画や特集を実行すること、さらに、新しい論文や論考のカテゴリーを考えることなどが方策となるのかもしれない。また、「討論」のようにすでに存在するカテゴリーをもっと活用してもよいか

もしれない。

個人的には、『パーソナリティ研究』には、日本心理学会の『心理学研究』のように、権威はあるが、取り澄ました雑誌になるのではなく、もっとフレンドリーに「こんなに面白い話があるよ」とどんどん語りかけてくれる存在であってほしいと思っている。

ニュースレター電子媒体化のお知らせ

理事長 杉山憲司（東洋大学）

2007年2月10日開催の第80回常任理事会におきまして、ニュースレターの紙媒体による発行を中止し、電子媒体化することを提案し、承認されました。この決定は、次年度の予算編成に際して、既存委員会の改変と予算の見直し、新たな委員会の発足に対応したものです。

電子媒体化によって、新年度より統合される「広報・インターネット運用委員会（仮称）」に学会内外への広報を一体化し、印刷費や発送費予算を新しい委員会へ配分することができます。しかし、これはニュースレターを軽視する決定ではありません。既に、機関誌のJ-STAGE上への電子掲載に伴い、機関誌は論文のみで構成されています。したがって、広報はニュースレターで行うしかないのでありますが、むしろ、電子化による速報性や画像などのリアルな配信の可能性もあります。このような決定の背景には、年次大会の発表申込の電子化、電子投稿制度の普及やメールニュースの配信実績などがあります。会員のみなさまにはご賢察のうえ、ご理解をお願いいたします。

なお、次号からのニュースレターの配信方法について、PDFによる配信にするか、HP上に掲載するかなどについては、現在、「広報・インターネット運用委員会（仮称）」において検討中です。会員向け広報誌としてのニュースレターへのご要望、ご意見がありましたら、事務局や委員会等にお寄せください。できる限り、運営等に反映させていきたいと考えています。

今回の「ミニ特集」は、「環境移行とパーソナリティ」と題して、学会員の方々が体験した、物理的な移動に伴う変化、社会的役割の変化などについて、幅広くつづいていただきました。

「箱根越え」

有光興記（駒澤大学文学部）

私は、2006年4月から神戸親和女子大学から駒澤大学に移動しました。その前には、関西の母校から広島修道大学に奉職し、1年半で神戸親和女子大学へ移動でした。PDで海外のラボを転々というのなら格好が良いですが、勤続40年という方もおられる大学業界では、各地を転々とした移動はめずらしいかもしれません。「時代の先取り…」と称して自慢（苦笑）しています。

環境移行という意味では、地理的に関西から関東へという地理的移動が分かりやすい変化だと思います。かつては、箱根には関所があり、山々を越えることが困難で「箱根八里」と呼ばれ旅人を苦しめたそうです。現代の新幹線なら、ビールを片手に富士山を見ながらトンネルをくぐって2時間30分で新大阪から東京に着きます。他には住環境の変化ですが、私はいつも団地住まいで相変わらずです。しんどいのは、愛車によるらくちん通勤が、乗車率が200%を超える痛勤！に変わってしまったことだろうか（8時頃に東急田園都市線：渋谷方面行きに乗ってみよう！）。新聞は4つ折りしても読めず、鞆は変形、腰がひねられて痛いです。

研究面では、プラスが多かったです。駒澤大学の心理学研究室は禅心理を筆頭に歴史・伝統があり、研究設備などが非常に充実しています。また、遅くまで研究室で研究に打ち込む先生や学生が多く、刺激になります。ス

トレスの要因としては、入試監督、模擬授業、卒論指導などいろいろあるわけだが、すでに経験済みなわけで、今更ぐちっても誰も聞いてくれないです。

今回のお題は、「環境移行とパーソナリティ」ということでした。35を越えた小太りおじさんでは、太いぶん痛勤や仕事ストレスではあまりパーソナリティには変化がありません（自覚的には…）。ただ、環境移行には、心理的な痛みが伴うのは事実かも知れません。引っ越しをすると、誰しも「あの店に行けない」、「あの人に会えない」、「あのラジオを聴けない」という感傷にふけることがあるのではないのでしょうか。私の場合も同じです。「また、会える」という社交辞令または自分への言い聞かせは、ほとんど無効であり、頭にはよい思い出ばかり思い出されます。なつかしい思い出は、心地よいものですが少しほろ苦く、浸れば浸るほど悲しくなります。とは言え、前向きに新しいことを始めるいい機会だと思って、後ろ向きな考えを前向きに変え、自分を鼓舞しております。実のところ、過去に執着しているようできて、楽しければよし！という思考回路のおかげで今のところなんとかやっているだけかもしれません。最近に関東に適応しようといういろいろ考えまして、関西弁に標準語を少し取り入れてしゃべっております（笑）。学会などで聞いていただき、笑っていただければ幸いです。

山から海へ

大久保智生（香川大学教育学部）

研究室の窓から正面に見えるのは、瀬戸内海。瀬戸内海の島々や行き交う船もはっきりと見えます。

右手には古戦場として名高い屋島も見えます。

このように書いていると、のんびりと景色を眺める余裕が出てきた自分の変化に気づきます。これまで、たまに狸が出たりする所沢の山の中(?)にいた私にとって、海が見える環境で働くことになることは全く想像もつきませんでした。加えて、当時はいろいろなことに追われて景色を眺める余裕など全くありませんでした。

香川に来て約1年が経とうとしています。これまでずっとせわしない生活をしてきたので、初めは香川ののんびりとした雰囲気にならなかつたかと心配していました。新しい環境に移行すると新たな人間関係を築かなければならず、よくわからないこと続きで適応の問題を抱えることになりやすいものです。特に適応しやすいと考えられている性格(その前に適応しやすい性格という実体があるのか?と思いますが)ではない私は、新しい環境に移ることは希望も少しはあるものの、かなりの苦痛を伴うものだと思っていました。

しかし、香川にやってきてすぐに、のんびりとした雰囲気に違和感なく適応してしま

った自分に驚きました。こんな性格(どんな性格かは想像にお任せしますが)の私でも周りの人に受け入れられ、たやすく適応できてしまうと、やはり性格は適応を予測しないものだなと思います。このように研究上だけでなく、実際の生活の中で性格は適応を予測しないことを実感しています。

また、環境が変わり、余裕が出てきたことで新たな研究のアイデアも湧いてきました。これまで、私は余裕や安定が研究を促進するとは思っていませんでした。むしろ、葛藤や不安定さが研究の原動力だとばかり思っていましたので、あえて自分を余裕のない状態へと追い込んできました。しかし、香川に来て、余裕が出てくることで見えてくるものもあることに気づきました。これは私の中では大きな変化です。

最近、余裕が出てきたことからこれまで行ってきた研究に加えて、新たな研究を始めました。始めたばかりで芽が出るかどうか、芽が出てもどんな花を咲かせるのかまだわかりませんが、せっかくのんびりとした雰囲気の中にいるわけですから、研究室の窓から海を見ながらのんびりと、でも着実に研究していこうと思っています。

富士山の見える街で

鈴木愛香（医療法人社団リラ溝口病院）

4年前の私は、埼玉の文京学院大学の修士課程に在籍していました。その後、諸事情あって実家のある静岡に戻り、1年間ほど、静岡大学の教育学研究科で研究生をしていました。研究生を終了すると、医療現場に就職するため、資格試験のための専門学校を選択しました。現在は、医療法人社団リラ溝口病院に、精神科カウンセラーとして勤務しています。

この4年間、所属や立場、そして生活環境が1年ごとに変わるなかで、私は様々な移行を経験しました： 関東から静岡への「生活環境の移行」、研究から医療の現場への「フィールドの移行」、学生から社会人への「社会的役割の移行」という3つです。

最も大きな移行は、「生活環境の移行」でした。ここでは、情報量と社会ネットワークが少ないことを痛感しました。もともと人脈が少なかったことにも起因しているとはいえ、関東では自然と入ってくるような情報や知識が、静岡では入手しにくいのです。静岡には博士課程を有する大学もなく、修士課程も新設したての大学がほとんどでした。そのため、同志や先輩方と巡り合うことが難しかったように思います（現在では多くの若い研究者が活躍しています）。つまり、手招きして待っているだけでは孤立無援状態、自分から積極的に情報収集したり、人を探しに行ったりするという“動くこと”が必要不可欠となるわけです。結果としてフットワークが軽

くなったという「副作用」もありましたが、自分の居場所を見つけることはなかなか大変な作業でした。

第2の「フィールドの移行」では、毎日の活動内容がガラリと変わったことが挙げられます。日々目の前に起こることと対峙し、判断し、対応をしていく。今までのペース配分では追いつかないことも多々あり、自分のペースを見つけるのに苦労しました。

第3の「社会的役割の移行」は、多くの方が経験する可能性のある移行の一つでしょう。社会人としての“信頼”が得られると同時に、それを守るという“責任”の重さを実感しました。

これらの移行は、元来頑固で変化に弱い私に、大きな経験と変化をもたらしたと感じています。これからの人生においても、環境や立場の「移行」を数多く経験することになると思います。それは結婚や出産であったり、転職など、様々なライフイベントに伴うものでしょう。そのような移行に対応すべく、ポケットの中身をガザガザと探索し、道具を巧みに使い分けるスキルを身に付けていきたいと思っています。新しい変化は、ストレスでもあり、恐くもあり、楽しみでもあり…。変化がある度に、この原稿を思い出して、“どんな変化なのだろう？”“何から何への移行だろう？”と、自分に問いかけてみようと思っています。

【研究余瀆】

個人差の心理学を半歩くらい進めて考える

高橋雄介（東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会）

「パーソナリティ研究」で取り扱っている研究分野は、パーソナリティ心理学であり、異常心理学でもあり、行動遺伝学でもあり、そしてそれらの境界領域でもあります。それらを全てひっくるめてまとめてしまいたいとき、「個人差の心理学」という単語は非常に便利かもしれません。個人差とは、パーソナリティや職業適性、学力などの諸特性のある集団内における個人間のばらつきや差異のことを指し、何らかの測度や尺度の下に定義される操作的なものです。実験的な研究では、ともすれば誤差として片付けられてしまうかもしれない個人差について、「パーソナリティ研究」はそれを積極的に取り扱おうとしています。以下、個人差の心理学は今後どのような方向性が考えられるのか半歩くらい進めて考えてみたいと思います。

個人差の研究は、その特性をもっているか否かというカテゴリー的な考え方ではなく、その特性をどの程度もっているかという次元的な考え方の下に成り立ち、連続量を仮定した変数を中心に、相関研究を行う場合が必然的に多くなります。ただし、ある集団内の個人間差において観測された相関関係は、個人内の心的過程における共変関係の個人差とは当然イコールではありませんので、個人レベルで想定される相関関係や共変関係の検討は、個人差研究の向かうべき大きな方向性のひとつであろうと考えられます。

さらに、私の考える個人差研究の大きな方

向性のもうひとつは、双生児法をベースとした行動遺伝学です。行動遺伝学は、表現型分散を遺伝分散と環境分散に分離して考え、ある集団における個人差を生み出すメカニズムに対して、通常の相関研究よりも、より積極的な説明を求める点で魅力的です。例えば、ある環境的な出来事が、子どもの発達に関連するある特性に影響を与えているかどうかを検討する場合、平均値の体系的な変化に関する問いに加えて、その特性の分散を大きくしたり小さくしたりすることがあるかどうかという問いに着目しています（ニュースレターNo.22「行動遺伝学からみたパーソナリティ」も参照）。行動遺伝学は「分散」に着眼点を置く稀有な個人差研究領域であるという点はしばしば忘れられがちなことかもしれませんが、私はそこにこそ醍醐味と将来性があると考えています。

最後に、個人差心理学の今後の方向性を考える意味で、パーソナリティや気質、社会的態度、能力などさまざまな個人差研究を概観できる国際学会をご紹介します。Personality and Individual Differences を刊行している International Society for the Study of Individual Differences は、隔年で国際学会を開いており、今年はドイツ中央部の大学都市ギーセンで7月下旬に開催されます。私は2回前の2003年の国際学会に参加し（このときの日本人参加者は7名）、「世の中で現在関心の持たれている個人差研究とは何か」を実際に肌で感じる事が出来たのでおすすめです。

日本パーソナリティ心理学会第15回大会「優秀大会発表賞」

前回に続きまして、日本パーソナリティ心理学会第15回大会にて「優秀大会発表賞」を設けました。今回は、6名を上限にして選考しました（受賞対象は筆頭発表者のみとなります）。選考委員による投票を集計し、常任理事会にて審議した結果、山形伸二氏、大和田智文氏、松尾由美氏、安井理紗氏、松田英子氏、の計5名（以上、発表番号順）の方に、優秀大会発表賞をお贈りすることになりました。受賞者の皆様、おめでとうございます。副賞としまして、前回同様、次年度大会の懇親会にご招待させていただきます、また懇親会にて表彰させていただく予定です。

第15回大会懇親会の席上で杉山理事長がおっしゃっていたように、研究発表のポスターの仕上がりが大変美しいものになってきているように思います。優秀大会発表賞設置の効果かもしれません。会員の皆様には、充実した研究内容を、美しくかつ分かりやすく呈示し、大会を盛り上げていただければ幸いです。

学会大会活性化特別委員会

内山伊知郎（同志社大学）・松田英子（江戸川大学）・村井潤一郎（文京学院大学）

優秀大会発表賞受賞者からのコメント

山形伸二（東京大学大学院総合文化研究科・
日本学術振興会）

名誉ある賞にご選出頂き、とても嬉しく、光栄に思います。調査にご協力頂いた双生児の皆さま、ご指導頂きました共著の先生方、そして日頃から暖かいご指導を頂いている繁榊算男先生と日夜苦楽をともにしている研究室の皆に心からお礼申し上げます。また当日は複数の先生方からとても貴重なコメントを頂きました。厚くお礼申し上げます。

今回の受賞を励みに、よりよい研究ができるよういっそう精進したいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

大和田智文（専修大学人文科学研究所：

2007年4月より現所属）

この度は、優秀大会発表賞を賜り大変光栄に存じます。研究を進める上で、下斗米淳教授からは温かい御指導を、学部生の皆様からは、調査者の慣れないインタビューに対し真剣かつ率

直なお答をいただきました。また発表当日には、大変多くの先生方から貴重なご指摘をいただくことができました。心より御礼を申し上げます。今回は、若者の「若者カテゴリ」への同化について一人称を素材として検討しましたが、今後さまざまな角度から検討を重ね、研究のさらなる発展に努めてまいりたいと考えます。

松尾由美（お茶の水女子大学大学院

人間文化研究科）

このたびは優秀大会発表賞を頂き大変光栄に存じます。このような賞を頂きましたのも日頃よりきめ細やかにご指導下さる坂元章先生や共同研究者の赤坂瑠以さん、調査にご協力頂いた方々のおかげであり、ここに深く感謝致します。発表テーマである携帯電話を用いた援助行動に関する研究は取り組み始めたばかりであり、さらに仔細な検討を加える必要があると考えております。今回の受賞を励みに、さらに研究を進展させていく所存です。今後とも皆様のご指導を賜りますようよろしくお願い致します。

安井理紗（大阪大学大学院人間科学研究科）

発表賞にご選出いただきありがとうございます。大変うれしく光栄に思っています。また、発表の際には多くの先生方から有益なご助言をいただき、多くの実りを得る大会であったと思っています。本研究は、所有物が対人行動に及ぼす影響を解明するための第一歩であり、特に持ち物の準備段階で抱かれる期待に注目して、対人場面における所有物の機能を探索的に検討しています。始めたばかりの研究ですが、この度の受賞を励みに、試行錯誤を重ねながら、更

なる研究に取り組んでいきたいと思えます。

松田英子（江戸川大学社会学部）

このたびの受賞に際しましては、大会時の発表をごらん頂き、数々のコメントを下された先生方に心より感謝申し上げます。大会活性化委員として賞をお受けしてよいものかどうか悩みましたが、夢および睡眠とパーソナリティという研究テーマを応援して下さったと受け止め、今後はこれまでも増して研究に心を傾けてまいります。どうも有難うございました。

第 16 回大会のお知らせ

【期日】2007 年 8 月 25 日（土）26 日（日）

【会場】帯広畜産大学

【大会準備委員長】渡邊芳之

【問い合わせ先】〒080-8555 北海道帯広市稲田町西 2 線 11 帯広畜産大学大学教育センター
日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会準備委員会

Tel. & Fax. 0155-49-5604

E-mail: jspp16@obihiro.ac.jp

【第 1 号通信】4 月上旬に発送予定。発表申し込み、シンポジウム企画の提案などの日程をお知らせします。

詳しい情報は、<http://www.obihiro.ac.jp/~psychology/jspp/> をご覧ください。

学会ウェブサイトのリニューアルのお知らせ

インターネット運用委員会委員長 荒川 歩（名古屋大学）

インターネット運用委員会では、ウェブサイトのリニューアル作業を行っております。新サイトは、見やすさ、軽さ、統一感をコンセプトに、近日中に公開予定です。また、今後は、パーソナリティ心理学に関する書評やインタビュー、若手研究者の研究紹介などの新規企画を毎月定期的にアップしていく予定ですので、どうぞご利用ください。

<http://www.soc.nii.ac.jp/jspp/>